

へいそくせいどうみやくこうかしょう 「閉塞性動脈硬化症について」

平成 27 年 3 月放送

木村 圭一

近年、日本人の超高齢化や食生活の欧米化による生活習慣病の増加とともに、
動脈硬化による病気が急増しています。動脈硬化とは、年齢とともに動脈が老
化し弾力性が失われて硬くなったり、動脈の内側にコレステロールなどの物質
が沈着して血管が狭くなったり詰まったりして、血液の流れが滞る状態をい
います。

動脈硬化が起こると、その血管の先の臓器に障害が起こります。例えば、心
臓に酸素や栄養を送る血管である冠動脈に動脈硬化が進行すれば「狭心症」
や「心筋梗塞」に、脳に酸素や栄養を送る血管である頸動脈や脳動脈に動脈
硬化が進行すれば「脳梗塞」になります。動脈硬化が引き起こす病気としては、
これら狭心症や心筋梗塞、脳梗塞が有名ですが、実は足にも動脈硬化は起こり
ます。足先に酸素や栄養を送る血管に動脈硬化が進行すれば「閉塞性動脈
硬化症」という病気の原因となります。

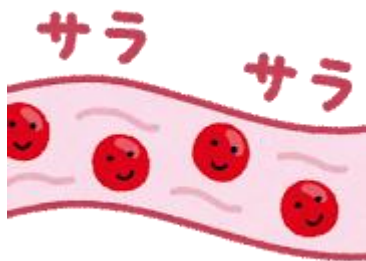
足の動脈硬化である「閉塞性動脈硬化症」の症状はどのようなものでしょう
か？初期の症状は、下肢の冷感やしびれです。進行すると、「間歇性跛行」とい
う症状が出現します。「間歇性跛行」とは、ある一定の距離を歩くと主にふくらは
ぎの筋肉に痛みが出現するものの、少し休憩すると痛みがなくなり、またし
ばらく歩くことができるようになる症状です。さらに病気が進行すると、じっ
としていても足が痛む「安静時疼痛」や皮膚のただれである「潰瘍」、足先の皮
膚や筋肉、骨などが血流不足のために腐ってしまう「壊死」などの症状が出現

します。

それでは、閉塞性動脈硬化症はどのように診断されるのでしょうか？先ほどの下肢の冷感やしびれ、ある一定の距離を歩くとふくらはぎの筋肉に痛みが出現する間歇性跛行かんけつせいはこうは自覚症状として重要ですが、単なる冷え性の方でも強い冷感やしびれは自覚しますし、間歇性跛行は腰の神経の病気である腰部脊柱管狭窄症きょうさくしやうでも出現しますので、症状だけで診断することは困難です。

閉塞性動脈硬化症は両手両足の血圧を測定するだけの比較的簡単な検査で診断可能です。両手両足の血圧を測定し、足と上腕じょうわんの血圧の比を測ることにより、下肢の血流低下の有無やその詳細な状況が確認できます。確定診断や治療方針を決定する際にはCT、MRIや血管造影検査けっかんぞうえいけんさが必要になります。

次に治療や予防法についてお話します。治療や予防の基本は、動脈硬化の危険因子である糖尿病、高血圧、脂質異常症の治療や予防を行うことです。また、タバコは動脈硬化の増悪因子ぞうあくいんしになりますから禁煙はとくに重要です。



閉塞性動脈硬化症としての最初の治療は「運動療法」と「薬物療法」になります。運動療法とは、主に「歩く」ことです。歩くことにより側副血行路そくふくけつこうろが発達し血行が改善するため、足の症状が出るまでは、休みながらも繰り返し歩くように心がけましょう。

薬物療法としては、主に血管を拡げる薬や血液を固まりにくくする薬を用います。治療抵抗性の場合や症状が強い場合には、狭くなった動脈を風船で広げたりステントを挿入する、いわゆるカテーテル治療や外科的バイパス手術が行われます。

動脈硬化は全身病です。閉塞性動脈硬化症の2～4割の人は、心臓や脳の動脈も狭くなったり詰まっていることが知られています。ですから閉塞性動脈硬化の早期診断は、足だけの問題だけでなく、命に直結する虚血性心疾患きよけつせいしんしつかんや脳血管疾患の早期発見という面からも重要になります。「ヒトは血管とともに老いる。」

と言われます。動脈硬化について正しい知識を持ち、本疾患の予防と治療、禁煙を含めた生活習慣の改善に心がけましょう。